



講演要旨
【博物館】

だて歴史文化ミュージアムスタートアップ講演会

〈講演〉「施設と都市をデザインすること」

室蘭工業大学くらし環境系領域・准教授 有村 幹治 氏

博士（工学）。専門は都市・地域計画・交通計画など。
伊達市総合文化館検討委員会（副座長）



■はじめに

私は（仮称）伊達市総合文化館（正式名称「だて歴史文化ミュージアム」）の検討委員会と伊達市の都市計画審議会に参画させていただいている。その中で、自分の専門分野から、人口減少社会という問題を都市からしっかりとと考え、福祉の役割や都市を創っていくときにどのような「場」づくりをしていくべきか、そして、その中で新しくできるミュージアムがどのように位置づけられるのか、ということをお話したいと思います。

■高齢化・人口減少社会と都市計画の課題

皆さんもご存知の通り、日本はアジアの中でもトップランナーで高齢化社会・人口減少社会が進んでいると言われています。こうした問題が、私たちが都市の中でしっかりと幸せに暮らしていけるかどうか考えていく上での大前提として存在しているわけです。

一時期話題になった増田寛也著『地方消滅』（中公新書）という本があります。その中で北海道が取り上げられていて、道内の事例が色々と書かれています。かなりセンセーショナルなタイトルの本ですが、悪いことばかりではなく、良いこととして、ニセコや興部・中標津のことが紹介されています。ニセコはみなさんご存知の通り、あれだけ外から人が流れ込んで新しいことがどんどん出来てきています。ただ、こうした事例が他にも応用できるかというと、そうではありません。

国立社会保障・人口問題研究所のデータから人口変遷をみると、現在は札幌市だけが突出して人口が多いことがわかります。そして、道内全体として右肩下がりに人口減少が進むことが予想されています。伊達市には2014年の12月31日時点で35,551人住んでいますが、やはり人口減少が進むことが予想されます。この右肩下がりの角度は人口減少の速度感とも言えるのですが、これを考えながら、どうやって「交流人口」を増やしていくか、ネットワークをどうやって作っていくかというところを考えいかなければなりません。

都市計画に携わる側としての反省もあります。これまで人口がどんどん増えていたので、市街地をどんどん拡大していました。帯広の事例では、1960年代と比べて2000年代では市街地が拡大しましたが、拡大した市街地の人口が減少すると空家が次々に生まれてしまい、外見上は建物があるけれども実態は人が住んでいない「穴ボコ」だらけの市街地となってしまう恐れもあります。これをどうマネジメントするかということが、今の都市計画の課題となっています。さらに帯広では、建てられてから100年を超すような建物もあり、これらを建て替えていく必要が出てきます。このリノベーションをどうしていくか、どのようなことを考えながら、街を活性化させていかなければならぬということも課題の一つです。

■人と人とのつながり

モータリゼーション（自動車の大衆化）の功罪というものもあります。一人一人が車を使うと、街が車で溢れてスペースがなくってしまいます（渋滞の原因ともなります）。しかし、車の数を減らすと実は街中にはスペースがあるのです。今、世界的に自転車や公共交通のことをしっかりとと考えようという流れになってきています。自転車や公共交通を充実させることで生まれるスペースを使って、例えばオープンカフェやお店をしてみましょうというように街の活性化案が出てきたりします。

また、人とかお金とか情報というのは、どこでも勝手に流れていく「動産」と考えられているのですが、人と人とのつながりというのは地域の中に根付いているものなので、動産ではなく「不動産」として捉えなければいけない地域の資産なのです。

人間関係というものは目には見えませんが、これがしっかりとしている土地というのは、誰かが困っていたら誰かが手を差し伸べることのできる良い社会です。これがないと、「無縁社会」などと呼ばれて様々な問題が出てきます。豊かな「地域」というものが大事で、「地域」をどう育てるのかというところも大切な問題です。

人と人とのつながり。みなさんご家庭では親であり、子であったり、私でしたら学生がいたりといろいろな関係性がありますが、人が減ってしまうと、単純に人が減るだけでなく、そうした人ととの関係性も減ってしまうのです。関係性が減ってしまうと、今までうまくいっていたことが上手くいかないというようなことも出てくるでしょう。だから、この関係性をどう街の中で作り上げるのかを考えなければなりません。

人が減ったとしても、今まで知らなくて「他者」だった人が自分の友達の友達であるとか、さらには、「居るよ」ということがわかっているだけでも、街の中でネットワークがどんどん拡がっていって、「人と人とのつながり」のある豊かな暮らしができるのではないかということを、都市計画の分野では重要視しています。

これまで、拡大や流動的といったことを考えながら、「とにかくモノを作ろう」ということでやってきたわけですが、これからは、ポスト・モータリゼーション（モータリゼーションからの脱却）にも目を向ける

必要があります。車はもちろん便利なものですから否定はしませんが、それだけではなくて、いろいろなものを組み合わせて、生きている意味や人生の意味を充実させる社会を考えていきましょうということを提案しています。

こうしたパラダイム・シフト（価値観の転換）が進んでいます。ヨーロッパの都市では必ず広場があるのはどうしてだろうと考えてみると、そこに住んでいる人が他の街から来た人と広場で会って、お互い知り合うということがすごく大事なのだとヤン・ゲールという著名な建築家も言っています。

■賑わう場をどう創るか

ここからは、街の中の「場」とは何だろう？ということを考えていきたいと思います。それは、賑わっている場所をどう創っていくのか、賑わうデザインをどう考えていくのかということに関わってきます。

映画『千と千尋の神隠し』の舞台のモデルとも言われている、台湾の九份（キュウファン）という街があります。こういうところに行くと気分が盛り上がるはどうしてでしょうか。照明や看板が醸し出す雰囲気のせいなのかな？などいろいろ考えられるのですが、ここを実際に歩いてみると、実はお互いがお互いを見ることができるということに気ができます。例えば、お店の中でお茶をしながら通りを歩いている人を見ていたりするのです。日本でも喫茶店やカフェに入って外を歩いている人を見る人間觀察が趣味という人が時々いますが、あれにはやはり理由があるのだと思います。

また、新しいことをあえて古い街に入れ込んでみようということをヨーロッパの人たちは考えています。例えば、札幌市のように市電が走るフランスのモンペリエという街では、市電の外装を一般のアーティストに解放するということをしています。非常に古い都市なのですが、斬新なデザインの市電が走っている。日本だと苦情がくるかもしれません、こういうことが行われているのです。また、この市電は乗降口が低く設計されているので、車椅子の方でもスムーズに乗り降りができるようになっています。ヨーロッパで進んでいる「移動のシームレス化（継ぎ目のない

移動)」がまだまだ日本ではできていない状況があります。

また、ヨーロッパの街中では通りにテーブルを出しているレストランを多く目にしますが、日本ではこれもなかなかできません。「公道で勝手に商売するな」と怒られてしまいます。ですが、これはとても楽しいことです。道を歩いている人は「あ、なんだかいい匂いがする」「美味しいそうな料理を食べているな」などと思い、料理を食べている人はまるで舞台に立っているような気分で、見られていることを意識するからオシャレをして街に出かけるわけです。

日本では学生が「オシャレな服を買ってもそれを着てどこに行くの?」とか「オシャレをして歩ける(歩きたい)場所がない」と言っているのを聞いたりしますが、そうした状況は変えていかなければと思っています。

ヨーロッパの古い街では、通りに一枚のレッドカーペットを敷いて服飾の専門学生がファッショショーンショーを開催し、それを市民に見てもらったり、カーディーラーがそのレッドカーペットの上に新車を置いてみたりということがありました。普段は建物の中でやっていることを、お客様が来るのを待つだけでなく、こちらから街に出てやってみようということを街ぐるみで楽しんでいます。すると、こんなに人がいたのかなと思うくらい街に活気が溢れるのです。

先ほどのモータリゼーションに話を戻すと、車に乗った瞬間に性格が変わったようになる人がいます。車に乗ると相手の顔が見えなくなるので、クラクションやパッシングなどの尖ったコミュニケーションになってしまいます。しかし、人間はもっと豊かな表現を持っているので、それが表に出てくるように変えていきたいと思っています。

フランスのリヨンでは、2000年に河川敷の駐車場を全部芝生に変えてその横に自転車専用道を作りました。渋滞の中を車で移動するよりも自転車の方が早いので、これまで車で通勤していた人たちが自転車を使うようになったりしています。もちろん車が全く必



だて歴史文化ミュージアム完成予想図

要ないというわけではありません。車を使わなければならぬ場所もありますが、ポイントを考えながら、人が集う場所に関しては、やはり人間を中心とした設計を考えていくことも大切です。

札幌でもアートスクールをあえて歩行者天国の屋外でやったことがあります。プライベートな閉じた空間でやっていたものをパブリック(公共)空間にもっていき、不特定多数の市民に参加してもらうような仕掛けです。

こうしたことは、その空間にいるお互いがお互いを知る、他者の存在を知るということにつながります。車で走っていて他者の顔が見えないのとは大きく違います。それだけで街のイメージというものが出てくるのです。このことは、だて歴史文化ミュージアムではどうしようか?ということを考える上でも大切になります。

■街の誇り

施設と都市をデザインすることは、街の誇りを表現することにもつながります。

例えば、先ほど紹介したフランスのリヨンの川沿いの自転車道の脇には、大理石の階段があり、対岸にある世界遺産の教会群をその階段に座って眺めることができます。さらに、ただ眺めるだけではなくて、12月になるとプロジェクションマッピングで教会が照らされて、それがよく見えるように階段の角度も調整されています。ここで重要なのは、このプロジェクショ

ンマッピングで、リヨンという街がなぜ成立したのかという、街の誇りを喚起させるような映像を30分間のプログラムで流しているということです。

ワインで有名なフランスのシャブリ地区の道路の脇に、ベンチがたった一つだけ置かれた場所があります。おそらく、このベンチを置いた人の意図は「ここに座って正面を見ろ」ということにあると思います。座って正面を向くと何が見えるかというと、教会なのです。その教会は、やはり街の成立と深い関係があり、昔は教会の鐘の音が聞こえる範囲が街の範囲だったのです。さらに、グラン・クリュ（ワインの特級畠）が一望のもとに見渡せる。そういう場所に、たった一つのベンチを置くことで街の誇りを表現してみせたのです。

■「場」としての「だて歴史文化ミュージアム」

最後に、だて歴史文化ミュージアムについて手短ではありますがあ話ししたいと思います。だて歴史文化ミュージアムの中身について動線計画的にいうと、「展示室を1階にしろ」というご意見もありました。資料の保存・保管という観点もあって、展示室は2階

にしているのですが、実は1階では伊達市の子供たちや市外からの修学旅行生、あるいは市民向けの体験や講座ができるスペースが取られているのです。そして、このスペースはあえてセミオーブンにしています。完全に閉じてしまって、外から何をやっているかわからないというような場所ではなくて、近くを通ると「お、何か中でやっているな」という、これまで街中の事例で紹介してきたような仕掛けにしています。

■おわりに

最後に、だて歴史文化ミュージアムへの期待として、もちろん伊達の文化財を見せることが大事なのですが、それだけではなくて、噴火湾全体を視野に入れて欲しいと思います。特に北海道新幹線の開通によって北海道にやってきた人たちを、どうやって噴火湾側に引き込むかということを考えると、動線的につながるようなもの、例えば円空の観音像や旅行者イザベラ・バードなどの企画展をやるものもいいかもしれませんね。

素晴らしいミュージアムが出来ることを願っています。

（第2回スタートアップ講演会 2016年1月19日）

——伊達市の文化財が紹介された本・雑誌・TV・展示・Webサイト——

■亘理伊達家資料

KKベストセラーズ『歴史人』特集「独眼竜政宗の野望」.2016年6月.
【政宗公御軍記】

ミュージアムスタイルカフェ『旅鶴』夏号.2016年6月.【貞桶】
JR北海道『THE JR Hokkaido』11月号.2016年11月.

【成実公甲冑・不易流銘学鳥獸狙点之図】
福島県南相馬市『原町市史』第1巻通史編Ⅰ.2016年12月.

【奥州相馬氏野馬追図屏風】

浄土宗文化局『浄土宗檀信徒宝典』2016年.【円空作聖観音像】
企画集団ぶりづむ『ゆきのまち通信』169号.2017年3月.【雛人形】
第14回自動車エンジン国際会議(14th International Conference
on Engines for Vehicles)ウェブサイト【成実公甲冑】

■北黄金貝塚

ユーキャン『日本大地図』全3巻.2016年9月.
交通新聞社『別冊旅の手帳青森・函館』2016年.
青森商工会議所『かけはし』3月号.2017年3月.
NEXCO東日本『北海道ドライブマップ2017春夏版』2017年3月.
NHK総合「北海道LOVEテレビ～北の縄文スペシャル～」.
2016年10月21日放送【北黄金貝塚】

崎山貝塚縄文の森ミュージアム【岩手県宮古市】
「崎山貝塚～みやこの海と森の原点を探る」.
2016年7月16日～9月19日【北黄金貝塚】
世界考古学会議第8回京都大会
(8th World Archaeological Congress)ウェブサイト

■有珠モシリ遺跡

瀧音能之監修『平成版 おとな歴史 謎多き古代史をめぐる』2016年5月.
笠倉出版社.【イモガイ製腕輪・クマのスプーン・鍔頭】

ト箕大綾編『東北アジア装飾古墳の研究』2016年6月.
周留城出版.韓国.【イモガイ製腕輪】

譽田亜紀子『ときめく縄文図鑑』2016年12月.山と渓谷社.【鍔頭】
瀧音能之監修『最新学説で読み解く日本の古代史』2017年2月.
宝島社.【イモガイ製腕輪・クマのスプーン】

Newsletter 【噴火湾文化】第11号

●編集・発行 伊達市噴火湾文化研究所

〒052-0031 伊達市館山町21番地5
TEL. 0142-21-5050 FAX. 0142-22-5445
E-mail bunka@city.date.hokkaido.jp
URL http://www.city.date.hokkaido.jp/funkawan/

●印刷 (有)共立印刷

〒052-0022 伊達市梅本町4番地4
TEL. 0142-23-2175 FAX. 0142-25-1971

2017年3月31日発行